



われら、さくほ人

佐久穂の新しい 花卉文化をつくる

花卉農家 中島 和輝さん [佐久中央小・佐久中卒 32歳]



フラワーデザインを学び、
栽培へ

花の色や形が多彩なトルコギキョウは、佐久穂町を代表する特産品の一つ。この一つ一つの花に愛情を込め育てている、花卉農家の中島和輝さん。生産者として、自信に満ちた表情が印象的だ。仕事に誇りを持ち、取り組み姿勢は、実に格好いい。

しかし、そんな中島さんも、最初からこの道を志していたわけではない。雑貨などのデザインの世界に興味を持ち、悩んだ末に、家業との中間をとって、フラワーデザインの道を目指した。「何よりいろんな業界を見てみたいと思ったんです」と中島さん。東京の専門学校でフラワーデザインを学んだが、入学当初は、クラスでも花のことを知らない方だったという。卒業後、実際に花屋で働く中で、生産物としての花にだんだんと興味は増していった。新宿や銀座などの花屋で働き、いろいろな情報が集まる場所、さまざまなニーズがある場所で、経験を積んだ。



花卉農家として
自分のスタイルを

23歳の時に、家庭の事情で実家に戻ることになった。それは生産者としてスタートすることの意味していた。当時、中島家では、生産だけでなく、小売やブーケづくりなども手掛けるようになっていた。そこに自分としての“色”を出すため、自分自身の屋号(店舗のない花屋)も持つことを決めた。「NOC(ノーチエ)」と名



キク、カーネーションから
トルコギキョウへ

一方で、“花業界”への危機感を持つ。昔は佐久穂といえば、キクだった。中島家も祖父の代でキク、カーネーション、父の代でカーネーションとバラをメインに扱っていた。特にバラなどは外国産の輸入物に押され、トルコギキョウ

「花は気が抜けない。自分の甘えがダイレクトに出てしまう。自分が集中できなかったときなど、モノが悪くなってしまう。きちんと目を掛けてやるのが大事です。今は自分の生活の一部。ごはんを食べるのと一緒。休みでも畑に行かないと気が済まないです」と、花に愛情を注ぐ毎日が続いている。

付けた。「NOC」は、イタリア語で「木の実」を意味する。「成長する中で一つの成果が木の実として結実します。また、それは次に続く、種でもあります。マークは、シャムロックという洋菊を使っています。菊は一般的に縁起の悪いイメージですが、シャムロックは外国では祝いの花に使われる花です。そういったとてもいい花にあやかって、既成概念をくつがえしていきたい、そんな思いを込めています」と中島さん。

帰郷後、間もなく家業を継いだ。それから数年、自分なりのスタイルを身に付けつつあるが、まだまだ学ぶことは多い。

へと移ってきた。今はトルコギキョウがメインだが、中島さんは、露地の花木を始めたり、冬の品目も何かできないかを模索している。花を実際に消費者に届ける場面や、フラワーデザインに携わってきたからこそ、もっと何かできるのでは、というもどかしさもある。「自分が花屋で学んだことを生産現場で活かしたい。いろんな場面を見て、知ってるからこそできることもあるはず。生産においても、小売においても、どうやって花を生活に組み込んでもらえるか、もっと身近な存在にしてみたいのが課題。花の魅力を発信していく場所をつくりたいですね」と意欲を見せる。

個人としてはもちろんだが、佐久穂町の花卉栽培の発展にも展望を持ち、「花卉農家で自分は一番の若手。自分ががんばることで、花卉農家を魅力的に思ってくれる人が増えたら。今後、つないで守っていくために、新規就農者を増やしたいですね」と力を込める。

新しい感性

を持ち、新しい風を持ち込む中島さん。今後、新しい花卉栽培の文化をつくっていくかもしれない。



現在は、フラワーアレンジメントも受注している。写真は「母の日」用のアレンジメント。



ヤマウラヒロコ / 1992年、旧八千穂村生まれ(八千穂小・八千穂中卒)。2014年、文星芸術大学美術学部卒業。幼少期より、空想や絵を描くことが好きで、大学在学時より絵の仕事始める。大学卒業後、広告代理店勤務を経て、現在フリーランス。栃木県を拠点に作家業のほか一般企業向けにイラスト、広告漫画制作なども手がけている。(連絡先: illust03yamaura@gmail.com)

懐かしのあの人はいま

小諸市立東小学校校長 小泉昌彦さん(58歳)

平成6年～12年までの7年間、八千穂小学校に勤務されていた小泉昌彦先生を覚えていますか。

この春、上田市立西内小学校より小諸市立東小学校長となり日々子どもたちに囲まれる小泉先生に、当時の八千穂小の思い出を語ってもらいました。

八千穂小はどんな印象でしたか

子どもたちはのびのび素直でみんないい子。保護者の方もみんな温かく、とても教育に熱心な村という印象でした。

剥がれたタイルで子どもが転ぶとすぐ修理、水が冷たすぎるシャワーは温水に、どんなことも即座に対応してくれる村に、全教員が感謝していました。

八千穂小ならではの思い出は

学校のすぐ近くにきれいな千曲川が流れている特徴を生かし、当時の校長が「全校川遊び」を発案。川にいる虫や魚を捕まえて、楽しい理科の学習ができました。シンボル魚としてイワナを飼おうと玄関に大きな水槽を置き、当時50万円はする冷却装置まで完備しました。

印象深い授業は

社会科で手作り模型を作り用水の学習をしました。大石川上流の標

高1900㍍の場所からどうやって水を引っぱったのか、とても興味深かったようです。

千曲川沿いにある「あたご公園」では、水槽で発眼卵からふ化させたイワナやヤマメの稚魚を千曲川に放流したこともあります。

ギターが得意と評判でした

ときどきギターを弾いて歌っていたのを子どもたちは覚えてくれたんですね。音楽は好きなので、音楽会などは特に熱が入っていたと思います。子どもたちの歌声は本当に素晴らしかった。

当時の教え子たちにエールを

これからも自分の夢を追い続け、充実した人生を送ってください。そしていつかふるさとに恩返しをし、社会に貢献できる人になってほしい。八千穂は釣りでよく行くので、どこかで見かけたら声を掛けてください。



前任の上田市立西内小学校の校長時は、金管バンドに力を入れ、優秀な成績を残す。